

一般演題抄録

I-2 一般住民における食事パターンが Metabolic dysfunction-associated steatotic liver disease に与える影響についての検討

○笹田貴史¹ 佐藤諭¹ 飯野勢¹ 笹田哲幸¹ 五十嵐剛¹ 三上達也²
 中路重之³ 櫻庭裕丈¹

¹弘前大学大学院医学研究科 消化器血液内科学講座

²弘前大学大学院医学研究科 先制医療学講座

³弘前大学大学院医学研究科 健康未来イノベーションセンター

【背景】脂肪肝の発症には食生活が影響し、日本食は肝線維化を抑制させる可能性が指摘されているが不明な点が多い。食事パターンと Metabolic dysfunction-associated steatotic liver disease (MASLD) との関連については明らかにされず、一般住民を対象として疫学的調査検討した。【方法】2018年いわき健康増進プロジェクトに参加した1056人のうち、欠損値等を除外した727名を解析対象とした。肝脂肪化と線維化はFibroscanを用いて評価した。簡易型自記式食事歴法質問票で聴取した52種類の食材に対して主成分分析し、非階層クラスター分析を行った。【結果】主成分分析では4つの主成分が抽出され、それぞれ摂取量が多い食材からRice群、Vegetable群、Seafood群、Sweet群と定義した。食事パターンはMASLDの有意なリスク因子としては抽出されなかったが、Vegetable群では他の群に比べBMI、血糖値、中性脂肪が低く、HDLが高値であった。続いて、MASLD集団のみを対象として解析したところ、Vegetable群は肝線維化の有意な低リスク因子として抽出された。Vegetable群で多く摂取していた食材別の検討では、人参・かぼちゃ・大根・かぶが肝線維化を抑制させる食材であった。さらに、栄養素についての検討では、αトコフェロールが肝線維化低リスクの有意な因子として認められた。【考察】野菜中心の食事は心血管代謝リスク因子を予防することでMASLDの発症・進展を防ぐことができる可能性がある。αトコフェロールはビタミンEの一種で抗酸化作用を有し、ビタミンEは実臨床において非アルコール性脂肪性肝炎の臨床的改善を示すことが知られている。本研究においてもビタミンE摂取がMASLDにおける肝線維化低リスク因子であることが示され、MASLD治療における有用性が示唆された。